

皆野・長瀬ロータリークラブ

週報

- ◇例会日
- ◇例会場
- ◇事務所



第1・第2木曜日 12:30~13:30 第3・第4木曜日のいずれか 18:30~19:30
 長瀬レクリエーションホテル 養浩亭
 〒369-1305 秩父郡長瀬町長瀬1446 養浩亭内
 Tel:0494-66-4134 / Fax:0494-66-4134 e-mail:minanaga@chichibu.ne.jp

UNITE
FOR
GOOD

よいことのために手をとってあおう

第1701回例会 令和7年8月28日(木)

【会長の時間】

畝 徳治

皆さん、こんばんは。親睦例会以外は、中身のある話をさせてもらっているつもりです。

今年度は「みいでら」という曲を9つに分けて、今日は2回目です。中身を紹介致します。

はじめの三行と下は場面が違ってきます。みいでらという所でお坊さん達が月見の準備をしていると。そこに向かって、シテというのがありますが、自分の子どもを探してみいでらに向かって行くという。お寺さんの場面とみいでらに向かう道中の場面が重なっています。

前半三行を読んでみます。

段落2「たぐいなき。名をもち月の今宵とて。たぐいなき。名を(持ち)もち月の今宵とて。名をもち月の今宵とてが2回出てきます。1回目はひらがなで、2回目は名を持ち月と漢字になっています。全体としてもち月ですが、前半は掛詞になっています。たぐいなき名をもつという事で、類がないという事で、特別良い名前を持っている月。しかもそれはもち月だという事で、「もち」と「もち」がかさなっています。謡曲は言葉遊びの所がかなりあります。

夕べを急ぐ人心(ひとごころ)。夕方になるのが待ち遠しいなど。

知るも知らぬも諸共に。不特定多数の人が集まるような形で月見をしようとしているので、知るも知らぬも混ざっているという言葉です。

雲を厭(いと)ふや予てより。雲が出なければいいなとか。

月の名頼む、日影かな・月の名たのむ日影かな。日陰かなというのは、よくわかりませんが、月を称えていると。

その後にシテが出て来て、謡います。一声という形で謡いますが、雪ならば幾たび袖を拂(はら)はまし。花の吹雪と詠じけん志賀の山越うち過ぎて。元歌は、「雪ならば いくたび袖をはらはまし 花の吹雪の 志賀の山越え」【中務卿 六華和歌集】

意味は降りそそぐ花びらが雪ならば何度袖を払ったであろうか 反語で(だが実際は桜の花びらだから払わないで行く)花の吹雪の志賀の山越えは京都の七口である荒神口から、近江に至る街道。シテが山越えをしながら琵琶湖へ向かう場面です。琵琶湖の眺めを謡っています。



かやうに心あり顔(がお)なれども。われは物に狂ふよなう。気が狂っているのだが、かやうに心あり顔は、外から見ると平静に見えると。平静に見えるが狂っているんだと。自分の子どもがいなくなって、探しているがための苦しみだ。

あの鳥類や畜類だにも。親子のあはれは知るぞかし。要は鳥とか獣でも親子の愛情はあると。自分は人間なのだからと、子どもを思う気持ちを分かちたい。

況してや人の親として。いとほしかなしと育てつる 下の子の行くへをも白糸のは、縁語で行く末を知らないという事を白糸と。後ろに乱れ心や狂ふらんとあり、心が乱れている自分の気持ちで、乱れると縁語で糸で、白糸が縁語です。行方が分からないという事で、白という言葉で表しますが、糸であったり雲、その後何が続くかで言葉が決まります。

前半がお寺の人が集まっている状況、後ろが子どもを探す親の気持ちを謡っている場面です。

【幹事報告】

山田 利明



1. 地区事務所より
 - ① 青少年交換プログラム派遣 学生帰国報告会の案内
 - ② ロータリー全国囲碁大会の案内
2. 米山梅吉記念館より館報、秋季例大祭、賛助会員募集の案内

【委員会報告】

1.

小埜 和也会員



8月23日に深谷東ロータリークラブの夜間例会に参加しました。一般の方を含めて70名くらいでした。メインの卓話講師が秩父ロータリークラブの島田憲一さんでした。ロータリーの活動プラス宮ノ側商店街の300回を越えるナイトバザールの始まった時の切っ掛けや苦労話を話して頂きました。その後、懇親会がありました。まだロータリーの会員と入会可能性のある人を誘ったりしていると思いますので、そういう取り組みで参考になりました。



山田 利明会員



宮前 英雄会員

みいでら段落2 「たぐいなき。名をもち月の今宵とて。

畝 徳治会長

ワキ・ワキツレ上歌「たぐいなき。名をもち月の今宵とて。名を望月の今宵とて。タベを急ぐ人心(ひと)とごころ)。知るも知らぬも諸共に。雲を厭(いと)ふや予てより。月の名頼む、日影かな・月の名たのむ日影かな

シテー声 「雪ならば幾たび袖を拂(はら)はまし。花の吹雪と詠じけん志賀の山越うち過ぎて。眺めの末はみずうみの。鳩(に)お照る比叡の山高み。上(うへ)見ぬ鷲のお山とやらんを(の)。今(いま)目の前に拝むことよ。あらありがたの御(おん)事や。

一セイ 「かやうに心あり顔(がお)なれども。われは物に狂ふよなう。いや我ながらことわりなり。あの鳥類や畜類だにも。親子のあはれは知るぞかし。

地 「況してや人の親として。いとほしかなしと育てつる

「子の行くへをも白糸の
「乱れ心(ごころ)や狂ふらん

